

# 土佐浄瑠璃の脚色法（十三）

——「頼朝遊覧揃」——

鳥居 フミ子

はじめに

土佐浄瑠璃「頼朝遊覧揃」は「宝永五戊子初秋上旬」という年号の記載のある木下甚右衛門板の正本がある。したがって、宝永五年に書肆木下甚右衛門から一括して出版された土佐浄瑠璃の一つで、初代土佐少掾の語りものである。曲中の節事は、土佐少掾の初期の段物集には収められておらず、「蘭曲後撰集」二にはじめて収載されているので、元禄末より宝永初年頃の浄瑠璃と考えられる。<sup>(1)</sup>

## 一 『唐糸さうし』と「頼朝遊覧揃」

「頼朝遊覧揃」は源頼朝の遊覧が題名になっているが、主筋は、木曾義仲の遺類唐糸とその弟手塚太郎光盛が頼朝の命をねらって敗北する話である。その題名からは唐糸の説話は連想されないが、頼朝が唐糸の刃から逃れたお礼参りに江の島へ出かけて遊覧するという設定で、頼朝の遊覧を唐糸説話に結びつけている。

「頼朝遊覧揃」のあらすじは次のようである。

## 第一

征夷將軍源賴朝の御台所朝日御前に仕える侍女唐糸は、木曾義仲の郎等手塚の別当の娘で、義仲の孝養のために賴朝の命をねらい、兄光盛や、木曾の余類伊賀齊藤五国遠・同齊藤六国武兄弟と心を通わせて機をうかがっている。唐糸から、内談のために鎌倉へ下るようにとの書状が届き、国武は鎌倉へむかうが、箱根山で朝比奈に逢い、首を討たれる。

## 第二

朝比奈が鎌倉へ首を持ち帰ると、時正はその首を国武の首と判定し、余類詮議のために由比ヶ浜にさらすことになる。

賴朝の御台所が庭の花見をしていると、上臈達が花争いを始めるが、唐糸はこれをとめて御台所からほめられる。御台所をはじめ一同は風呂に入ることになる。唐糸が湯から上って腰元に髪を梳かせているところを風呂奉行梶原景時がかいまみて心を動かし、執拗に口説く。

風呂奉行の土肥実平がきて唐糸の着物の下から九寸五分の太刀を発見し、唐糸を捕えようとする。唐糸は物陰にかくれていた梶原の腰から刀を抜き取って切りかかるが実平に生捕られる。

## 第三

賴朝は唐糸の持っていた太刀から唐糸を木曾義仲の余類と見抜いて牢に入れさせ、難を免れたお礼に江の島弁才天に参詣し、三浦の館に立ち寄って遊ぶ。帰りの御座船の上で、賴朝に召し出されて、玉の井は金沢八景の名所の物語をし、朝比奈は船のおこりを語りつつ舞う（ゆふらん揃金沢八けい）。

手塚太郎光盛が落人を集めて岡崎城にたてこもっているというしらせがくるので、賴朝は畠山重忠に討手を命じ

る。

#### 第四

遠江池田宿の長者遊屋の侍従は、かつて宗盛に仕えていた白拍子で、唐糸の娘万寿姫を弟子として養っている。

万寿はつばめの親子をみて東国の母を思い、書き置きして家を出ようとする。これをみつけた遊屋は万寿と共に鎌倉にむかう（ゆふらん揃やまんしゆの道行）。

万寿と遊屋は唐糸の閉じ込められている石牢のあたりで酒を売り、番人を酔わせて牢の鍵を盗み、唐糸を助け出す。万寿は母の身代りに牢の中に入る。

この様子を物陰から見ていた牢番の宗持は万寿の孝心に感動して頼朝に言上する。

#### 第五

頼朝は宗持から万寿の孝行を聞き、絶対に許すまじと思っていた唐糸を許す。

唐糸は遠江の兄光盛の許へ頼朝から受けた恩を書いて送る。

唐糸・万寿・遊屋の三人は、頼朝と諸大名の前で舞う（ゆふらん揃かまくら名所舞の段）。

#### 第六

畠山重忠は光盛を攻めあぐんでいる。朝比奈が光盛に唐糸の手紙を届けると、頼朝への抵抗を断念した光盛は太刀をくわえて矢倉の下へとび降りて死ぬ。

木曾義仲の余類唐糸が頼朝の命をねらって石牢に入れられ、娘万寿がこれを助けたという話は御伽草子『唐糸さうし』によって広められたものである。川瀬一馬氏は、御伽草子『唐糸さうし』に語られている話は「南北朝の申楽芸

の盛行と共に現われ出たものであるという気がする。」と説明している。<sup>(2)</sup> 頼朝によって非業の死を遂げた木曾義仲の残党をめぐる話は、『唐糸さうし』に定着する以前から、いろいろに語られていたものと思われる。<sup>(3)</sup>

御伽草子『唐糸さうし』は数多くの御伽草子の中でも広く流布したものであった。江戸時代を迎えて間もなく渋川清右衛門が出版した『御伽草子』二十三篇の中にも入っている。<sup>(4)</sup> 万治二年刊『鎌倉物語』(中川喜雲著)の中の「からいとが籠」に語られている話は御伽草子『唐糸さうし』とほとんど同じ内容である。江戸時代初期には御伽草子によって唐糸の話が流布していたと考えられる。

『唐糸さうし』の内容は次のようである。

頼朝は都で権勢をふるっている木曾義仲の追討を命じる。

鎌倉殿には義仲の侍、手塚太郎金刺光盛の娘、唐糸の前という女房が仕えていた。唐糸は父光盛を通じて頼朝勢の上京を義仲に知らせ、木曾に伝わるちやくいという名刀を願ひ受け、頼朝の命をねらう。唐糸は大御所と御台の薬湯の供をし、風呂場においた小袖の下から脇差をみつけれ、捕えられて松が岡殿に預けられる。松が岡殿の計らいで唐糸は信濃へ送られるが、途中で梶原景時に逢って連れ戻され、石牢に入れられる。

信濃に残る唐糸の十三歳の娘万寿姫は母の入牢を知って嘆き悲しみ、乳母更科を伴って鎌倉へ下る。

鎌倉に着いた万寿は御台から侍従の局に奉公することを許され、ひそかに母の行方を探し、下女の会話から母が石牢に入れられていることをつきとめる。

鎌倉山の花見の折、万寿は石牢に忍んで行って母に会い、その後、九か月の間ひそかに母の許に通う。

次の年の正月二日、鎌倉殿のし、の間の畳のへりに小松が六本生える。博士に占わせると、吉兆として小松を鶴が岡の玉垣の内へ移し、十二人の手弱女<sup>たおやめ</sup>を揃えて今様を歌わせよとある。十一人の舞妓が選ばれるが一人足りな

いので万寿が召し出されることになる。

万寿が御台から賜わった装束をつけて今様を歌い舞うと、頼朝はそのすばらしさに感動して万寿と共に舞う。次の日、頼朝は万寿に引出物を与えようとする。万寿は、石牢の中にいる母唐糸の命と自分の命を取り替えていただきたいと願う。頼朝は唐糸を許し、万寿に引出物を与える。

万寿は母唐糸を連れて信濃へ帰り、尼公に対面して喜び合い、所領を賜わって繁昌する。

これは万寿の親孝行の故に現された鶴岡八幡大菩薩の御方便であった。

『唐糸さうし』は万寿姫の孝行談であるが、それを八幡大菩薩の靈驗談と結びつけているところに特色がある。<sup>(5)</sup>さらに、舞徳説話の要素をも備えている。万寿姫が母の唐糸を救うことができたのは八幡大菩薩が孝行な娘を助けたためであり、直接的には姫が今様を上手に舞ったためであるとしている。これは中世の説話に一般的に見られる靈驗談と舞徳談の渾融した話型を示すものである。万寿姫の孝行の幸福な結末は、このような姫を助ける外部的な要因によってもたらされたのである。

土佐浄瑠璃「頼朝遊覧揃」は、このような中世的特色を持つ『唐糸さうし』をどのように改変しているであろうか。『唐糸さうし』と対比させながら「頼朝遊覧揃」の脚色上の特色をみたいと思う。

## 二 孝行談の近世化

「頼朝遊覧揃」の特色としてまずあげられるのは孝行談の近世的変質である。

『唐糸さうし』の万寿は、母の入牢を知って、母の命のある間に母に会おうとして鎌倉へ出かける決心をする。万寿は侍女の更科に対して

わが身いかやうにも、鎌倉へ尋ねこし、御行方を尋ね聞かまほしく候へ。<sup>(6)</sup>

と言い、その門出に当っては

親を尋ぬる門出なれば、めでたき事を菊染の御小袖、しけむらさきの織物に、十二ひとへをひきかさね、柳色の袴を着て、市女笠をめされける。

と記されている。万寿の出発は「親を尋」ねてのものであったと説明されているのである。

鎌倉に下った万寿は母を探し当て、ひそかに母の石牢に通うことになる。それは九か月にもおよんでいる。万寿は、頼朝から望みの引出物をと問われて、はじめて母の命に代わらんことを願い、頼朝は許すまじと思っていた唐糸を

此度のよろこびには、いづれの物か惜しからん、

と言って許すのである。万寿の身代りは実行に移されることなく、万寿の舞の徳によって唐糸は救われるのである。このように、『唐糸さうし』では万寿の孝行は、身代りという極限的な行為によってでなく、母を尋ねて鎌倉へ下向し、忍んで母に会いに通うという苦心談の中に述べられていることに注目しておきたい。

これに対して、「頼朝遊覧揃」の万寿は、母の身代りなろうという行為を実際に行動にうつしているのである。

万寿は石牢のあたりで酒を売り、番人に酒を飲ませて酔わせ、鍵を盗んで母を牢から出し、直ちに母に代って自分が牢の中に入る。母の身代りになろうという気持を直接行動に現しているのである。唐糸が助けられたのは、この万寿のけなげな行動をみて感動した牢番の訴えに頼朝が感じてのことである。ここでは、万寿の身代りの行為によって母は助かるという人間実在の親孝行談になっているのである。

万寿と唐糸・遊屋の三人は頼朝の恩に深く感謝し、頼朝と諸大名の前で鎌倉の名所を歌いながら舞う。これは頼朝への謝恩の舞である。『唐糸さうし』の持っていた中世的な舞徳談の要素は全くなくなって、華やかな節事の見せ場として唐糸救命譚の結尾に付加されることになっているのである。

ここで、さらに注目しておかなければならないのは、「頼朝遊覧揃」の唐糸の救出談には、神仏の靈験談的要素がなくなっていることである。『唐糸さうし』では、万寿の幸せは正八幡大菩薩が万寿の孝心故に示された靈験であるとしている。しかし、殿の畳のへりに生えた六本の小松の吉兆が原因になって万寿が今様を歌い舞うことになり、その舞の徳によって唐糸は救われたのである。「頼朝遊覧揃」では、このような吉兆を現す六本の小松の件は扱われていない。万寿の母救助の行為は万寿自身の意志によってなされている所に「頼朝遊覧揃」の特色がある。このような万寿の自覚による意志的な孝行は、中世的な孝行談から近世的な孝行談への脱皮を示すものといえることができるであろう。

土佐浄瑠璃には「頼朝遊覧揃」の万寿と同じような孝子の姿を「蓬萊源氏」の人丸姫にもみることが出来る。人丸姫は、父景清に頼朝への帰服を説き続け、石牢に入れられた父をいさめて自害しようとする。景清は人丸姫の孝心に感じ、ついに節をまげて頼朝に仕える決心をして両眼を抉り抜き、日向に所領を与えられることになる。「蓬萊源氏」では、人丸姫が父のために自らの命を絶とうとする場面が感動的に扱われている。景清が長年の節をまげるという劇的行動が娘の献身的な行為によってもたらされることになっているのである。

このように、「頼朝遊覧揃」や「蓬萊源氏」には、父母を自らの強い意志によって救おうとする行為が劇的展開の契機になっている。そこに、中世の孝行談につきまとっている神仏の靈験の要素が全くなっていることは中世的孝行談の近世的変貌として注目されなければならないであろう。土佐浄瑠璃は近世的な人間中心の孝行談として仕組んでいるのである。ここに、土佐浄瑠璃の目指した合理化の方向を認めることができるように思う。

「頼朝遊覧揃」の万寿姫が石牢の番人を酒に酔わせ、番人から牢の鍵を盗んで母を救い出す件は、古浄瑠璃「和国美人哥諍」(寛文頃刊)の、松世姫が一同を酔いつぶしておいて牢の鍵を盗み、牢から父を救い出すのと同工である。「和国美人哥諍」は元禄期以前に何度も板を重ねた古浄瑠璃で、寛文頃から流行していたと考えられる。<sup>(7)</sup>土佐浄瑠璃は御伽草子『唐糸さうし』を脚色するに当って、この「和国美人哥諍」の父救出の場面を導入したのであろう。この場合、「和国美人哥諍」では玉津島明神が松世姫の孝心に感応して姫を助けることになっているが、「頼朝遊覧揃」ではそのような霊験談的性格が全くなっていることは前述の通りである。

「頼朝遊覧揃」は、先行の御伽草子や古浄瑠璃を応用しながら、舞徳談的要素や霊験談的性格を払い落して近世的な合理化を果しているのである。

### 三 古浄瑠璃の趣向取り

次に「頼朝遊覧揃」の特色としてあげられるのは、先行古浄瑠璃からの趣向取りである。「頼朝遊覧揃」は題名に「遊覧揃」とうたっているように、一曲の中に意識的に見せ場を盛り沢山に用意した曲である。そして、その見せ場に先行古浄瑠璃「くわてき船軍」(万治三年板 所属太夫不明)で人々に親しまれるようになった趣向をとり込んでいるのである。次にその趣向取りの様相をみることにする。

#### ① 花争い

「頼朝遊覧揃」二段めに、頼朝の御台所の花見の席で上臈が花争いをし、白梅と紅梅の枝を打ち合う場面がある。これは「くわてき船軍」で、玄宗皇帝の將軍しばとんが上臈達を二分して、それぞれに梅の枝と桜の枝を持たせ、庭前



において軍法の稽古をさせる花軍の趣向の応用である。この場面の両者の関係は、「頼朝遊覧揃」の次のような御台の言葉にあきらかである。

よくもいはれしから糸かな。もろこしのげんそうは。官女に仰せて花いくさ。是は梅見の打あいを。御見かせいせし言葉のすゑ。くわてきにまさるからいと御きげん。ことにうるはしく<sup>(8)</sup>

御台は花争いを制した唐糸を「くわてき船軍」の將軍くわてきに匹適するとはめている。「頼朝遊覧揃」の花争いの趣向は「くわてき船軍」の趣向を前提にしているのである。

## ② 節事

「頼朝遊覧揃」の三段めは、頼朝の鎌倉参詣につづいて金沢八景の節事がつづく。この節事は三段めのほとんど全体をしめており、「頼朝遊覧揃」の中心場面となっている。この節事の後半で、朝比奈が召し出されて船のおこりを語りつつ舞うことになる。その詞章は、「くわてき船軍」二段め後半の、くわてき兄弟が逆臣を滅ぼすために一万艘の船を造る場面が利用されている。両者を対比してみよう。

### くわてき船軍

### 頼朝遊覧揃

それ。ふねのおこりを尋るに。水上くわうていの、御宇よりおこつて。ながれくわてきが。はかりことによれり、こゝに。しゅうといへる、げきしん有。かれを。ほろぼさんとし給ふにおうごうの、海を。へたてゝ便なし。臣下大臣。此評定に日をかさぬ。爰にくわてきと申したる。

有時、ていしやうの、いけのみぎはに立出て、このはく／＼のみぢはの、水にうつるをながめせしに、折ふし、あきもなかばにて、さむきあらしにちる、やなぎのはがちり、さらばさら、はらく／＼とさそひて、ひとは水に、うかみしが、こゝに又くもといふむし、是も、こくうにをちけるが、その一はの上にのりつゝ、次第く／＼に、さがにの、いとはかなくも、やなぎのはが、ふきくる風にさそはれ、なみにゆられてながれしが、ついにみぎわに、ふきよする、くもはそれよりはいいが、ふしぎに、命をたすかり、たちくるくものふるまひ、けにもと思ひて、兄弟は、うみをわたすたよりをば、たくみもとむとよろこびて、にはかに、ざいもくきりよせて、あまたのばんじやう、めしあつめ、たくみて舟をぞ、つくられける、

(略)

一まんぞうのふねをそろへ、よろひものゝぐ、おつ取こめ、なかにも君の御ざぶねを、れうどうげきしう丸と、なづけたてまつり、

ちぼうのしそつ有けるが。

ある夕ぐれにていしやうの。いけの面を見わたせは、折ふし秋の。月きよく。さむるあらしにちる柳。一よう水にうかみしに。又くもといふ生るい。是もこくうにおちけるが。一はのうへにさそはれて。次第く／＼にさゝかに。糸はかなくもりうようを。ふきくる風にさそはれて。みぎはによりし秋きりの。立くる蜘蛛のふるまひ、おげにもと思ひそめしより、たくみてふねを。つくれるとや。御帝みかどはこれにめされて。おうごうをこぎわたり。げきしんやすくほろぼして。御代を始め給ふ事、一万八千ざいとかな。然れは舟のせんの字を。君にすゝむとかくとかや。いわゆる天子の御がをば。りやうがと名付奉り。さて又君の御座船を。りやうとう、げきしうと申也。

「頼朝遊覧揃」では、船の起源を説くに当って、「くわてき船軍」の詞章を借用し、それを節事に行っているのである。

「頼朝遊覧揃」はこのように頼朝が登場する場面に、古浄瑠璃「くわてき船軍」の花争いの趣向を導入し、詞章を利用して節事にするという脚色法をとっている。新しい題材の中に部分的な趣向として古浄瑠璃を応用する場合、むしろ改変の手を加えないで挿入する方が効果的であったのであろう。観客の愛好している周知の場面や詞章が新しい劇的世界の中に挿入され、新しい登場人物によって新しい意味を付加されて演じられるという二重構造は、和歌における本歌取りの手法にも通じるものである。趣向の二重うつしによって世界をひろげ、親炙している詞章を節事として提示することによって観客の歓心をあつめることができたのであろう。土佐浄瑠璃では積極的にこの脚色法を採用しているのである。

#### 四 濡れ場の設定

「頼朝遊覧揃」の第三の特色は、『唐糸さうし』に見られなかった濡れの場面が新たに設けられていることである。『唐糸さうし』では、唐糸は大御所と御台所の葉湯の供をし、ぬいでおいた小袖の下から懐剣を発見してしまったことが簡単に説明されている。「頼朝遊覧揃」ではこれをつややかな濡れの場面にしたのである。唐糸は風呂から上って、腰元まがきに髪を梳かせる。風呂奉行の梶原景時は唐糸の姿をかいま見て懸想し、唐糸に言い寄り、なびかない唐糸に執拗に迫る。この濡れの場面が見せ場になっているのである。中世の頼朝の世界は、この濡れ場によって近世の情調を横溢させることになる。梶原景時は遊女に言い寄る近世の遊湯児となっているのである。

梶原景時はよく知られているように、石橋山の合戦の折に山中の伏木の中に身を隠した頼朝を救い、その功によっ

て頼朝に信任されたが、巧みな弁舌によって対立者を讒言して君寵をほしいままにしたので御家人達の反感を買うことが多く、頼朝の死後、鎌倉から追放され、追討軍と戦って敗死するに至った人物である。『吾妻鏡』にも次のような三浦義村の言が記されている。

凡文治以降、依景時讒殞命失滅之輩、不可勝計、或于今見存、或累葉含愁憤多之、<sup>(10)</sup>

景時は、江戸時代に入って浄瑠璃や歌舞伎の登場人物となるが、判官びいきの風潮が高まるにつれて次第に悪役的性格が強調されていくことになる。例えば、近松門左衛門作「源義経将基経」(宝永三年一月竹本座初演)では、梶原景時は「げじげし 蚊虫梶原」と呼ばれ、人から嫌われ憎まれる人物となっている。

「頼朝遊覧揃」では、景時は濡れの場面で、口説いてもなびかぬ唐糸にむかって、自分のことを弁解して次のように言っている。

人のそねみにかぢはらは。ざんしやよねいよいぢわると。とり／＼さはなしけれど。さ。たれありてがんぜんに。申したるものもなし。しかれば世人のそねみぞかし。

ここで、梶原景時は自ら讒者・佞人と言われて人々に嫌われていることを認めている。この景時の言葉に、この頃の江戸ではすでに嫌われ者としての景時像が定着していたことが知られるのである。

ここで、さらに注目しておきたいのは、「頼朝遊覧揃」では、このように嫌われる梶原景時をパロディ化して登場させていることである。自らを「讒者・佞人」と認めつつ言いわけしているのも観客の笑いを誘うためと解される。また、執拗に唐糸に言い寄ってなびかせようとするがふられてしまい、奥に入っていく唐糸の姿を忘然と見送る景時の姿は、天下に名だたる頼朝の寵臣であるだけに見る者の笑いをさそう姿である。その場面は次のように描かれている。

先おくよりも召るゝに。おそなはりてはそのかたの。御ためもいかゝ也。かさねていなせは申べし。はなさせ給

へとふりきれば。かげ時おつかけ引とゞむを。是はく<sup>く</sup>と立のくさま。ひとへのおびにしどろまへつくるはざるにやうしよくの。たかぬかはりはさなからにとうくわの雨に。うるほひて。ほころびあへる。ごとく也。

かげ時はひざふるひ。おなひきなくはいつまでもと。まろびながらもすそをとり。たへ入ばかりに見へにけり。

このような景時は後世の笑劇的な滑稽味を含む敵役、ちやり敵がたきに通じるように思われる。この場面の後で、景時は物陰にかくれるが、追いつめられた唐糸に腰の太刀を抜き取られ、唐糸はその太刀を振り廻して太刀廻りをする事になる。景時は権勢をふるう武士でありながら臆病で色好みな男として登場し、観客の笑いをさそっているのである。このような景時像が江戸の観客に喜ばれ、定着していくことになるのである。

## 五 遊屋の登場

「頼朝遊覧揃」に新しく登場する人物に遊屋ゆやがある。遊屋は長者（遊女屋の主人）で、今様をよくする白拍子である。万寿を預かって今様を伝授し、万寿が鎌倉に下ることを知ると万寿の供をして旅立ち、万寿を助ける。唐糸が許されることになる、万寿・唐糸と共に舞って見せ場を展開する。

遊屋は『唐糸さうし』に登場する万寿の乳人更科にかえられた人物である。万寿が今様の上手であったという『唐糸さうし』の話の筋を発展させるためには、幼い万寿を預って今様を教えた人物を設定することは理にかなった発想と思われる。

遊屋は謡曲「熊野くまの」によって親しまれていた白拍子である。謡曲「熊野」は、都において平宗盛に寵愛されていた遊屋が老母の病の重い由の文を得て故郷遠江池田宿に帰ることを願い出るが許されず、東山の花見に連れて行かれるが、村雨に花の散るのを見て詠じた歌によって帰国を許されるという筋である。

「熊野」は中世から近世にかけて盛んに上演されていた能の中でも最も好まれた曲目の一つであった。下間少進法印の『能の留帳』にも、天正十六年から慶長二十年までの二十七年間に「湯谷（熊野）」の上演回数は八十四回で、鬘物二十二曲中最も上演回数が多い曲目となっている。<sup>(11)</sup> 謡曲「熊野」によって、白拍子遊屋は人々に広く親しまれていたであろうことが察知できる。

宇治加賀掾浄瑠璃に「遊屋物語」（延宝四年板）がある。これは、牛若と鬼一法眼の娘桂姫との恋物語が主筋の浄瑠璃であるが、その一段めに謡曲「熊野」をとり込んでいる。その内容は謡曲「熊野」とほとんど同じである。

「頼朝遊覧掬」では、このように宗盛に愛された白拍子として親しまれていた遊屋を登場させ、万寿姫とのかかわりを、遊屋が宗盛に許されて遠江へ帰国後のこととして展開したのである。四段めの冒頭には次のように先行の謡曲「熊野」や古浄瑠璃「遊屋物語」に示された遊屋の前半生が語られている。

遠江の国。いけたのしゆくの長者をば。ゆやのじじうと申ける。是は一とせ。平家の大將。宗盛公へ召寄られ。はなの都に有けるが。ゆやが母。もつての外はやまふゆへ。いけだへ帰り其後は。母もむなく成ければ、ねぐら。定ぬやもめとり。ふうきにさかへ有けるが。又たぐひなき白びやうし。世上にそのなをふれけるが。

都から遠江に下った遊屋は唐糸の娘万寿姫を弟子として養い、白拍子の舞を伝授したのである。

万寿を養い育てた人物として観客周知の白拍子遊屋を設定したことは説得力もあり、劇的效果も大きかったと思われる。五段めの結末では、万寿・唐糸の他に舞の名手として評判の遊屋が加わり、三人の舞が披露されることになる。『唐糸さうし』の万寿一人による舞は「頼朝遊覧掬」では三人の白拍子によって華やかに舞われることになっているのである。

## 六 節事の重視

「頼朝遊覧揃」は節事による見せ場の多い曲である。次のような節事がある。

ゆふらん揃金沢八けい

(三段め)

ゆふらん揃ゆやまんしゆの道行

(四段め)

ゆふらん揃かまくら名所舞の段

(五段め)

これらの節事は、曲全体に対して重い比重で扱われている。三段め・五段めの節事は、それぞれの段のほとんど全体にわたるほどの長さで、重要な場面となっている。金沢八景や鎌倉の名所が長々と説明されている。四段めの道行は、遠江から江戸への東海道の風景がつぎつぎにあげられている。節事によって語られる金沢八景の美しい風景や鎌倉の名所、東海道の風物などは元禄末から宝永初年にかけての江戸の人々の興味を集めるのに十分な題材であったと思われる。

これらの節事は人形による舞踊表現を伴っていることも見逃せないところである。三段めの「金沢八けい」は、頼朝の御前で白拍子玉の井によって舞われ、つづいて朝比奈によって船のおこりが語りつつ舞われる。五段めの「かまくら名所舞の段」は頼朝や諸大名の御前で万寿・唐糸・遊屋の三人によって舞われている。

「頼朝遊覧揃」はその題名の示すように、節事の見せ場を御伽草子『唐糸さうし』につけ加えるという手法によって思いつかれた作であったと言っても過言ではないであろう。

おわりに

「頼朝遊覧揃」は人々周知の御伽草子『唐糸さうし』を軸にして脚色されている。大筋は『唐糸さうし』によりながら、『唐糸さうし』の孝行談を本質的に変更している。それは『唐糸さうし』の持っていた中世的な靈驗談の要素や歌徳説話の要素を払拭して近世的な孝行談として再生するという脚色法による変質であった。主人公万寿は母を牢から出してその身代りとして自から牢の中に入る。母の命に代らんと願いを実行したのである。この脚色は御伽草子『唐糸さうし』に親しんでいた人々にとっては新鮮で、強い感銘を与えたことであろう。唐糸が許されたのは、この万寿のけなげな身代りの行為に原因しているとしたのである。

このように「頼朝遊覧揃」の唐糸の救済が神仏の加護によるものでなく、孝子の衷心によるものとしていところ、明確に中世孝行談の近世化をみることができる。「頼朝遊覧揃」の万寿の孝行談は人間中心の合理精神にもとづく近世の孝行談として再生されているのである。

注

- (1) 拙編『土佐浄瑠璃正本集』第二(角川書店 昭和五十年)所収「頼朝遊覧揃」解題参照。
- (2) 『慶長・元和頃刊 唐糸草子解説』(古典籍複製叢刊 雄松堂書店 昭和五十四年)。  
古活字版
- (3) 御伽草子『唐糸さうし』は室町期の成立。作中の松が岡殿・藤沢道場(開設は正中元年(二三二四))など、成立時代の宗教的状况を反映しているとの見解があり(『日本古典文学大辞典』第二卷(岩波書店 昭和五十九年)所収「唐糸草紙」項(武久堅執筆)、これによれば『唐糸さうし』の成立は源平時代よりもはるかに後である)。
- (4) 初板の年代は明らかでないが、日本古典文学大系『御伽草子』(岩波書店 昭和三十三年)の解説(市古貞次)によれば、



「寛文年間あるいはそれよりも多少溯るころの板行」と思われる。

- (5) 阪口弘之「万寿の物語」(『芸能史研究』第九四号 昭和六十一年七月)では、万寿は、中世の「語り物世界に於て、源氏の統領達と八幡信仰に深く関って登場してきた名前である」としている。

- (6) 引用本文は日本古典文学大系『御伽草子』(前出)による(ただし、振り仮名は省略)。以下同じ。

- (7) 『古浄瑠璃正本集』第八(角川書店 昭和五十五年)所収「和国びじん哥諍并こそでうり」解題参照。

- (8) 引用本文は拙編『土佐浄瑠璃正本集』第二(前出)による(ただし、節付けは省略)。以下同じ。

- (9) 引用本文は『古浄瑠璃正本集』第三(角川書店 昭和三十九年)による。

- (10) 『吾妻鏡吉川本』(国書刊行会 大正十二年)正治元年十月廿七日の条。

- (11) 林屋辰三郎『かぶきの成立』(推古書院 昭和二十四年)による。